



会報に寄せて

理学部同窓会会長 物理支部長 麿 沢 祐 一

理学部同窓会会長を各支部長で輪番に務めることになりましたので、今回は僭越ではありますが、物理支部長の私が書かせていただきます。

さて、現在（令和4年7月）、コロナ禍のために、世界中が大きな影響を受けております。すでに、3年を超える期間この状態が続いており、先日訪れました新潟大学理学部は以前よりは学生がキャンパスにいるようですが、通常に比べ少ない感じを受けました。第7波が来たとの報道もあり、相変わらず人混みを避けたりマスク着用など様々なことに気をつけたりする必要がありますので、いつまで続くかと心を悩ませます。しかし、このような中にあっても学生にとっては、今が大学で学ぶ貴重な時間であり、人生を支える大事な経験をする場であります。この状況でも、学生一人一人が新潟大学で学ぶことで人生の大きな一歩を歩んでいただければと願っております。

ところで、現在私は私立高校で物理を教えています。生徒からは授業が分かり易いといわれますが、中間・期末考査など定期考査でよくできるように感じても、大学入試の模擬テストではなかなか思ったような結果は出ません。定期テストでは、授業内容の理解をみるための出題が多く、試験範囲も狭いので、予想問題を多く練習できます。さらに大事なことは、試験範囲全部を丸暗記してしまう生徒も出るほど、生徒はいい点を取りたいとやる気を出すので、こちらが期待したような結果になるのでしょう。

それに対して同じ試験でも、模試は広範囲で、出題

者側は点数に差をつけて実力差を測る目的のため、生徒には比較的難しいものが出題されるなど大きく性格が異なります。そこで、生徒はなかなか意欲的になれません。しかし、教師は生徒に物理を教えるのが役割です。常に分かり易さだけでなく模試も意識した授業を展開すれば生徒は模試もよい結果になると思っています。

先日、偶然にも直前の授業内容が出題された模試がありました。しかし、直前に授業をしたにもかかわらず、それをほとんどの生徒は解けなかったのです。教えた内容がすぐに出題されたという、これ以上ない条件にもかかわらず、どういうことなのか分からず、私は混乱しました。教える側の私に課題が突きつけられました。教えることの難しさを思い知り、さらに授業を改善する必要性を感じざるを得ませんでした。

さて、新潟大学は75周年を迎え、その記念事業の成功にむけて全学同窓会や理学部同窓会が懇談会等を開催して活発に活動しております。同窓会の会員の皆様、どうかこの周年行事を皆様のお力によって盛り上げ、新潟大学および理学部がより一層発展しますようお願い申し上げます。私たちが現在あるのは、これまで理学部の先生方や関係する職員の皆様からご支援していただいたおかげです。深く感謝いたしております。

今後とも、同窓会として理学部の教育活動を支援してまいりたいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。



理学部の近況

理学部長 大 鳥 範 和

今年度もコロナ禍の下での学期始めとなりましたが、6月から開始の第2タームにおいては、授業実施の基本方針が大きく転換され、現在、多くの授業が対面で実施されるに至っています。海外からの留学生の入国も徐々にですが再開され、夏の日差しの下、キャンパス内では、外国人を含む多くの学生が行きかう姿を再び見ることができるようになりました。また、理学部のサイエンスミュージアムも附属図書館と併せて、学外利用者に対して7月1日から開館を再開します。さらに、8月9、10日に開催予定のオープンキャンパスも、3年ぶりに、予約制ではあるものの、対面でも実施されます。この会報が皆様のお手元に届く頃には、まだまだ制約はあるものの、開かれた大学に少しは戻ることができているものと期待しています。

今春に遡りますが、卒業式と入学式も3年ぶりに朱鷺メッセで挙行し、理学部卒業祝賀会もANAクラウンホテルで開催しました。理学部では、205名の卒業生を送り出して、209名の新入生と11名の3年次編入生を迎えました。出席者を卒業生や新入生・編入生に限定した式典ではありましたが、皆さんの晴れの姿を拝見できたことは誠にご同慶の至りです。改めて心からのお祝いを申し上げます。

一方、さらに遡りますが、11月に予定しておりました高大連携活動のうち、「中高生のためのシンポジウム」については、昨年この欄で実施予定を広報しておりましたところ、誠に残念ながら結局中止となりました。ご期待されていた皆様方には深くお詫びを申し上げます。今後については、再開に向けて人選を含めて関係部署に検討を依頼しているところです。また、同じくこの欄で言及していましたA1棟の改修工事についても、本省から財務省への概算要求には至りませんでした。理由として、改修によって実現される機能強化が不十分と評価されたことが挙げられます。老朽化による「順番待ち」といった受動的姿勢からの転換が必要と言えます。そこで今年は、下記の中期計画でも言及する「社会との共創」を前面に掲げて、現在、A棟の正面玄関にあるサイエンスミュージアムをA1棟の1階に移設し、またA棟5階にあるマルチメディア教室を、ICT-DXスペースとして、A1棟5階にリニューアルする案を作成し、本学から本省への要求として改めて提出されたところです。

さて、本学を含むすべての国立大学は、平成16年4月から文部科学省が設置する国の機関から、「国立大

学法人」という独立した機関になりましたが、同年から文部科学大臣が定める6年間の中期目標に基づき、中期計画及び年度計画を策定することが義務付けられています。すなわち、法人化して早や18年が経過し、今年度から第4期中期計画（年度計画は廃止）が始まることになります。本学でも独自の計画を含めて策定し、取り組み始めたところです。また、計画の達成状況が評価の対象となり、近年はその評価結果が運営費交付金の配分にも影響しています。

本学の第4期中期計画の特徴に「社会との共創」があります。理学部ではこれに呼応して、「総合大学として新潟地域の市民に科学技術の知を提供するサイエンスハブとしての共創スペースの設置」を謳っています。また、挑戦的な取り組みとして、「サイエンスキャンパス新潟」として「本学理学部の高大・地域連携活動として、未来の日本を支える科学人材を発掘、育成することを目的として、理学部キャンパスにおいて、地域の児童・生徒に対して、科学に関する研究指導の提供や、課題研究等を実践する場」を提供し、科学人材育成を小学校・中学校・高等学校から大学まで連続して行うことを謳っています。具体的には、上述のように、A1棟の改修で実現を目指しているICT-DXスペースの整備やサイエンスミュージアムの移設・拡充をベースとして、これらを理学部で培われた知の発信拠点とし、またSSHなどの高大連携活動に新潟ジュニアドクター育成塾の運営を加えた包括的な教育連携を目指したいと考えています。特に後者は、新潟県教育庁、理科センター、教育委員会、教員の皆様のご協力が不可欠です。さらに、「理学部の持つ高度な教育研究力に基づき、社会人の学び直し（リカレント教育）の体制を準備、構築し、これまで実施してきた市民解放授業などを拡充すると共に、専門知識・技術を習得可能な公開講座などの開発に取り組む」ことを謳っており、同窓会の皆さまにも是非ご関心を持って頂きたい、お願いをする次第です。

来年度、本学は創立75周年を迎えます。これに当たって、全学75周年記念事業実行委員会が組織され、また理学部でも同様の組織を発足させました。理学部では50年史に続いて、75年史の発行を予定しておりますが、記念史に記すべき情報の収集には同窓会の皆様方のご協力を仰ぐ必要もあるかと拝察いたします。その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。

プログラムだより

数学プログラム

プログラム長 星 明考

2021年度は、学部学生37名、博士前期課程4名（9月修了1名を含む）、博士後期課程1名が卒業・修了しました。3月22日には、新潟大学学生表彰の表彰式がZoomにて行われ、数理科学コース博士後期課程2年の中野泰河さん、3年の金井和貴さんが学生表彰を受けました。本表彰は、在学期間において極めて優秀な学業成績を修め、高い評価を受けた学生及び学術研究活動において特に顕著な成果を挙げ、学界又は社会的に高い評価を受けた学生を表彰するもので、数学プログラム・数理科学コースでは、一昨年の3名、昨年の2名に続く表彰となりました。

12月22日には、新潟大学優秀論文表彰の対象者41名（対象論文50編）が決定し、劉雪峰先生と私の2名が被表彰者となりました。本表彰は、新潟大学の研究成果の国際発信力を高め、研究意欲向上を図るため、国際的に評価の高い学術誌に論文を掲載した研究者を顕彰し研究費を支援するものです。劉先生は昨年度に続いての表彰で、こちらも数学プログラムの研究力の高さを表す出来事の1つとなりました。

数学プログラム講演会を2021年度もZoomで実施しました。前期は7月21日に水谷華氏（新潟県立新潟南高等学校）が「大学生活と教員生活」、7月28日に田邊京平氏（JCCソフト）が「数学科卒でエンジニアになって感じたこと」という題目で、後期は11月25日に沢崎陽一氏（新潟県立新発田南高等学校）が「高校教員20年を振り返って」、寺澤琢磨氏（新潟明訓高等学校）が「領域・展開を教えて」という題目でご講演下さり、卒業生の4名の大変貴重なお話から、現役学部生・現役大学院生たちが大きな学びを得ることが出来ました。

2022年度に入り、5月25日に理学部コロキウムが久しぶりに対面で実施され、大井志穂先生が題目「バナッハ環のスペクトルと保存問題の研究」として講演されました。開催ポスターにもあるように、数学を研究する際の心得（大切にしたいこと・目指していること）を分野外の方や学部学生向けにお話しされ、数学の世界に広がる、人情豊かな素敵な風景についてご紹介いただきました。密にならない配慮の上ですが、理学部B棟303講義室に多くの学生・教員が集まる姿を久しぶりに見ることができ、対面の講演の意義を感じ取るとともに、なんだか懐かしい気持ちにさえなりました。

6月になると、第1学期第2タームから、感染の状

況を見据えながら、可能な限り対面型授業を拡大する、という大学の授業実施方針が示されました。大井志穂先生、渡邊恵一先生、折田龍馬先生と一緒に担当する学部1年生の理学基礎演習（数学プログラム）でも教室で対面の授業が始まりました。4月の第1タームからZoomで画面越しには授業を受けてきた学生ですが、実際に会うのは初めて、という何とも不思議な現象も起きました。1グループ6名程度の8グループに分かれてグループ学習を行いました。学生同士で対面で協力して数学に取り組む姿を目の当たりにすると、こちらも勇気づけられる思いでした。

物理学プログラム

プログラム長 大野 義章

物理学プログラムでは、原子核理論グループに本郷優助教が本年4月着任されました。本郷先生は、2019年に「局所ギブスアンサンブルに基づく場の量子論による相対論的流体力学の定式化」の研究で第13回日本物理学会若手奨励賞（第20回核理論新人論文賞）を受賞されるなど、この分野の若手リーダーの1人として活躍されています。若手教員の着任は昨年度の高エネルギー物理学グループの佐藤優太郎助教に続き2年連続となりましたが、当該グループはもちろんのこと、物理学プログラム全体の活性化と発展に繋がるものと期待されます。また、これは昨年度ご報告すべき事でしたが、昨年4月に本学に着任されました小山翔子助教は、学部は創生学部を担当されていますが、大学院は物理学プログラムの教員とともに物理学コースを担当されています。小山先生は宇宙物理学の観測（電波天文学）をご専門とされており、小山先生が参加されているプロジェクトの「天の川銀河中心のブラックホールの撮影に初めて成功」という研究成果が最近の新聞報道等でも注目を集めています。さらに、やはり天文学をご専門とされている自然環境科学プログラム主担当の下西隆准教授が、物理学プログラムの副担当も兼任されることになりました。物理学プログラムには、素粒子・原子核・物性の各分野に理論と実験のグループがありますが、これまで理論グループのみでした宇宙分野にさらに観測の専門家が加わることにより、素粒子・原子核・物性・宇宙の全分野の理論と実験（観測）をカバーする全国的にも数少ない大学の1つとなりました。

6月9日（木）に、今年度が第20回目となりますケルビン祭が、教室における対面とZoomを用いたオン

ラインの双方で参加できるハイフレックス型で開催され、対面では約20名、オンラインでは約60名の学生が参加しました。世話人の石川先生の発案により、オンライン参加者のコメントを会場スクリーンに投影する一方、リモートカメラや集音マイクを用いて会場の雰囲気オンライン参加者にも伝わるようにしました。例年通り、大学院入試説明会や、学生と教員による対話集会、学生による各研究室の紹介が行われましたが、特に今回初の試みとして、対話集会で5～6人のグループに分かれてオンライン講義などについて活発な意見交換が行われました。また、これらに先だって、物理学科の第一期卒業生である中山高様からの寄付金を基にした「中山賞」、および、同窓会物理学科支部のご支援により2014年に創設された「同窓会奨励賞」が、それぞれ成績優秀な3名の4年生に授与されました。さらに、物理学プログラムに新たに配属された2年生（理学部理学科への改組以降、学生は2年次2学期に各プログラムに配属されます）に対する「同窓会新人奨励賞」が、同窓会物理学科支部長の麴沢祐一様のご尽力により新設され、成績優秀な4名の2年生（授与時点では3年生）に授与されました。このような表彰は、学生にとって大いに励みになっていますので、今後はさらに大学院生（学部卒業生の約3分の2が進学しています）にも対象を拡げること検討して頂けると有り難いです。

化学プログラム

プログラム長 古川 和広

引き続きコロナ禍で、保護者の方々や学生諸君にはご心配、ご不安な日々が続いていることと思います。ただし、大学ではコロナ対策を十分に行い、昨年度末の卒業式は3年ぶりに朱鷺メッセで挙行され、今年度はじめの入学式も例年に近いかたちで開催できるようになってきております。また、一般生活においても対面で行われる講義が増えつつあり、第1学期の第2タームからは、ほぼ全面的に対面で実施される方向で検討が進められております。化学プログラムでも、15名の教員と3名の職員、18名で、コロナ対策を十分に行い、学生の教育から生活までのサポートをできるよう励みたいと考えております。

学生の動向につきましては、本年の3月末には34名の4年生が無事卒業致しました。卒業生は、1名が教員に、3名が公務員に、12名が県内外の企業等へと進路を決め、18名が大学院に進学いたしました。卒業された皆さんは新たな環境で活躍すべく、切磋琢磨されておられることと思います。大学院へ進学された18名のうち17名は新潟大学大学院自然科学研究科化学コー

スに進学となっております。各研究室では、彼ら自身の研究に加え、後輩の指導も含め、共に研究室を運営して行くことができることに教員一同、大きな期待と喜びを感じております。

この4月には卒業生と入れ替わり、入学試験を乗り越えた理学科学生1年生209名が入学しております。化学プログラムへは理学科1年生の中から推薦学生10名、Frontier science program(FSP)学生6名の16名が新たにに加わり、教員および職員共々で、総勢百六名の学生（1年生16名、2年生(推薦・FSP)13名、3年生42名、4年生35名）と新たな気持ちで大学での活動を行っております。

化学プログラムでは「教員と学生」および「学生間」の結びつきをよりスムーズにするため、いろいろな行事が計画されております。入学後すぐに行なわれる催しとして、教員と1年の推薦とFSP学生が参加する「化学プログラム新入生歓迎懇談会」と、教員と1から4年生に加え大学院生も参加する「タテコン」があります。コロナ禍で中止しておりましたが、「化学プログラム新入生歓迎懇談会」は、昨年度春から、例年通りの完全な形にはまだなっておりませんが再開しております。「タテコン」についても、昨年度は秋に3年生が中心となりZoomを用いて実施されております。今年度春には、新3年生の努力で、さらに工夫された企画で、大学院生も含めて実施されました。新入生の方々は友人や知人を作る良い機会となったと思います。コロナもかなり収束してきたようですので、化学プログラム全員が一同に介して、「研究や勉強について話し合える」ときが来る日も近いと期待しております。

教職員一同も学生に負けず、授業の履修や日頃の生活状況の把握とサポートを寄りいっそう充実したものにしていきたいと考えております。至らぬ点多々あると思いますが、化学科・プログラム同窓会の皆様におきましては、今後ともご支援ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

生物プログラム

プログラム長 酒井 達也

生物学プログラムの近況をご報告します。教員は進化・分子生物学分野を担当されていた池内桃子准教授が奈良先端大学院大学に移動されました。一方、生化学・分子生物学分野に新たな助教・田崎英祐先生が着任しました。田崎先生はシロアリの長寿の謎を研究しています。今後の活躍を期待しています。学部学生は3月に29名が卒業しました。その内訳といたしましては、大学院進学16名、就職13名（企業12名[県内3名、県外9名]、公務員1名）、となりました。昨年度2学

期には、理学科2年生（現3年生）の29名が生物学プログラムを主専攻プログラムとして希望し配属されました。また本年度は理学部改組後6年目を迎え、4月に理学科生として新入生を迎えています。生物学プログラムを選んだFSP学生と推薦入学生は9名いました。3年次編入生は1名を迎えました。今後の活躍を楽しみにしています。

例年、配属決定した2年生の歓迎をかねて、9月末に生物学プログラム全体の夏の懇親会、4月の夜に教員とFSP・推薦入学生・3年次編入生で懇談会、を開催するのですが、新型コロナ感染による自粛は続いており、開催を取りやめました。また、冬の学生と教員の意見交換会もオンライン開催になるなど、学生教員間、学生間、のコミュニケーションが不足がちになっています。大学本部はR4年度第2タームより対面講義に戻すことを通達いたしましたが、教室収容人数を半分にする制限はかかったままであり、実際には教室が足りずに非対面講義のままの科目も多いです。来年R5年度には、新型コロナ感染もおさまり、大学キャンパスに通常の学生生活が戻ることを期待しています。

大学のスリム化運営による退職者補充削減は続いており、生物学プログラム教員数は11名とここ数年変化はないものの高齢化は着実に進んでいます（現在の平均はおよそ54.3歳）。今後7名の定年退職者をむかえる2030年度までにプログラムの枠組みやカリキュラム内容改変が完了してはなりません。自然環境科学、フィールド科学、地質学、それぞれのプログラムと将来どう協力していくか話し合いが始まっています。日本の少子高齢化を背景に、日々変化する大学運営の状況に対応する努力が求められています。同窓生の皆さまの一層のご支援をよろしくお願いいたします。

地質科学プログラム

プログラム長 小西 博巳

2022年3月には、地質科学プログラム2期目の学生21名が卒業し、11名が新潟大学の博士後期課程（修士課程）に進学し、土木建設関係に8名、資源関係に1名、自治体に1名が就職しました。また、博士前期課程修了者は、土木建設関係に4名、資源関係に1名就職し、博士後期課程修了者2名は、引き続き、研究を続けています。地質関係の企業からの求人が多く、就職希望者は、ほぼ、地質関係の会社に就職できています。大学で学んだことが、ストレートに職業に結びついているのは、理学部でも地質科学プログラムだけで、地質科学プログラムの魅力の一つになっています。

2022年7月現在、3年生15名、4年生12名です。理学部改組前の地質科学科の定員25名から比べると、4割から5割減です。現在の1・2年生のプログラム配属希望調査を見ると、この傾向は、しばらく、続きそうです。理学科で入学して広く理学の基礎を学び進路を選択するというのが建前ですが、実際には、入学時点のプログラム配属希望は、ほぼ変わりません。学生に地質の魅力を伝える努力をしても、ほとんど影響を与えられないのは、残念です。

博士前期課程には、22名、博士後期課程には7名の大学院生が在学しています。インド、中国、パキスタンからの大学院生も学んでいます。今年の大学院入試の志願状況を見ると、来年度の博士前期課程進学者が非常に少なくなります。4年生の人数が少ないことも一因ではありますが、大学院進学の魅力伝える努力をもっとしなければならぬと教員一同反省しています。

新型コロナウイルス感染症への対策から、大学での教育・研究に制限が続いており、オンライン授業が中心です。コロナ禍が始まって3年になりますが、現在の3年生以下の学生は、コロナ禍前の大学の雰囲気を知りません。地質科学プログラムは、伝統的に、学生間の繋がりの強いところでしたが、その伝統を継承することが難しくなっていると危惧しています。

「地質の日 サイエンスフェスティバル in 五十嵐キャンパス」は、3年連続で中止となりました。大学祭の時期に開催される新潟大学Weekの「地質まつり」では、「地質科学 卒業生と在校生の集い」だけが、オンラインで行われました。

地質科学科から地質科学プログラムに変わりましたが、野外地質調査能力の高い人材を育てることは、引き続き、地質科学プログラムの重要な教育目標です。この点では、今後もぶれずに、教育を進めて行きたいと思います。今後とも、皆様方の暖かいご支援を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。



自然環境科学プログラム

プログラム長 副島 浩一

令和3年度の自然環境科学プログラム卒業生は31名でした。そのうち大学院へ11名が進学しております。入場者の制限があったものの、久しぶりに朱鷺メッセでの卒業式、ANAクラウンホテルでの理学部祝賀会がコロナ禍の中で実施できたことは、節目をきちんとお祝いするという意味で、とてもよかったと思っています。また、この卒業式で自然環境科学科所属の学生数がゼロになりましたので、令和3年度末をもちまして自然環境科学科という組織の名前はなくなりました。

令和4年度から新たに宇宙化学がご専門で電波天文

観測をおこなっている下西隆先生を超越学院からお迎えすることができました。下西先生は卓越研究員として本学の超越学院に2年弱所属された間に素晴らしい業績を上げられ、早期テニユア付与と同時に自然科学系准教授に昇任され、本プログラム物質循環科学大講座の一員になりました。銀河系外の星間物質探査の日本を代表する若手研究者で、非常にアクティブに活動されていることから、本プログラムにとどまらず理学部全体に新しい風を吹き込んでいただけるものと確信しております。一方、約15年間本学の教育研究に携わってこられた浮田甚郎教授が令和4年3月末日にご退職されました。浮田先生は西村先生の後任として本学科／プログラムに気象学を根付かせた立役者で、GISセンター立ち上げ、運営に尽力なさった功績の他、自然科学研究科の運営にも貢献されました。浮田先生のご退職により、自然環境プログラムの地球環境科学大講座に本プログラム主担当教員がいなくなりました。当面はフィールド人材育成科学プログラムとの連携を強化することで対応するしか方法がないのですが、将来的な大きな宿題が出されてしまい頭の痛いところです。それに比べると小さな問題ではありますが、コロナ禍の影響で、送別会、歓迎会等のプログラム主催「イベント」が先送りされていることが個人的には気になっています。パツと思いつくだけで、増田先生の叙勲お祝い、湯川先生、久保田先生の退職祝い、新事務員の北さんの歓迎会、等々、順番待ち状態です。これまで我慢した分これからは「イベント」盛りだくさんとプラスに捉え、これまで我慢してきましたが、そろそろ限界に達しそうです。講義形式が第2タームからは対面が基本になるなど、幸いコロナ禍の出口が見え始めましたので、機会を覗き、列をなしているプログラム主催「イベント」を順次速やかに開催していきたいと思っています。特に増田先生のお祝いに関しては同窓会の皆様にもお声がけする予定でありますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

同窓会の皆様におかれましては、これまでのご高配にお礼を申し上げますと共に暖かなご支援を今後とも賜りますよう、よろしくお願いいたします。

○ 資料提供のお願い ○ 古いお写真をご提供ください

新潟大学ならびに理学部は令和6（2024）年に創立75周年を迎えます。この機にフィルムカメラ時代の貴重な写真資料を収集したいと存じます。ご提供いただいたお写真は、電子化した後、お返しいたします。皆様のお手元に、もし学生時代を過ごした新潟大学のキャンパス風景、あるいは各種イベント等を撮影したお写真がございましたら、理学部同窓会事務局（連絡先：会報の末尾）までご一報ください。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長 奈良岡 千之

2022年3月に13名の理学部所属卒業生を第二期生として送り出しました。フィールド科学人材育成プログラムの接続大学院として、2021年4月より設置された大学院自然科学研究科の環境科学専攻「フィールド科学コース」には、第二期生から10名の学生が進学しました。農学部フィールド科学人材育成プログラムの卒業生、他コースや他大学から入学した学生を合わせると22名の学生がフィールド科学コースで4月から研究を進めています。

2021年8月のオープンキャンパスはオンライン開催だったため、高校生には本プログラムの研究活動の動画を視聴していただきました。対面実施が検討されている2022年度のオープンキャンパスでは、本プログラムの「フィールド科学」を実践する学生より野外調査の話を直接聞いてもらいたいと考えています。

2021年10月には、気象学を専門とする本田明治教授がNHK新潟ニュース610に出演し、真鍋淑郎さんノーベル物理学賞受賞の喜びを元同僚として語りました。地球惑星科学分野での受賞は快挙であり、ノーベル賞に続く研究を新潟大学から発信できることを期待します。

2021年11月～翌年3月にかけて、野口里奈助教が第63次南極地域観測隊に参加しました。南極では、昭和基地周辺に展開されている観測点の保守作業のほか、火星模擬地の探索をおこないました。南極には氷や雪で覆われていない岩盤が露出した場所があります。こうした領域は寒くて空気が乾燥している且つ植物や生命に乏しいことから、火星を模擬した研究フィールドとしての利用が期待されています。今回取得したデータをもとに南極の火星模擬フィールドでどのような研究がおこなわれるか楽しみです。

在校生にフィールド科学研究の魅力を知ってもらうため、フィールド科学分野のプログラムや研究室を紹介するフィールドナビが6月9日に大学図書館1階広場で対面で開催されました。朝10時からはじめた準備には、各研究室から1～2名の卒論生や大学院生が参加し、久しぶりの対面でのイベントに皆楽しそうに準備してくれました。学生89名の来場があり、各研究室のポスター前で熱心に研究室の説明を聞く姿が印象的でした。多くの学生がフィールド科学研究に関心を持ってくれることを期待しています。

支部だより

数学科

支部長 轡田 勝祐

令和4年も、数学科支部の会議等はオンラインで行なわれています。支部役員会は3月26日に開催され、予算・事業について昨年度の報告と今年度の実施案、支部役員の変更案を審議いたしました。その結果を5月14日に開催された理学部同窓会役員会で了承を得ることができ、6月19日の総会で承認いただきました。

役員変更についてお知らせいたします。武石文雄（20回卒）さんが、理学部同窓会長、数学科支部長を退任されました。同窓会活動にご尽力いただいていることに感謝申し上げます。武石さんは、同窓会幹事を継続されています。なお、轡田勝祐（28回卒）が新たに数学科支部長に選出されました。よろしくお願いたします。次に、飯田昭男（29回卒）さんが新たに副支部長に選出されています。同窓会幹事については、樋浦卓嘉（12回卒）さんが退任され、私がはいました。また、同窓会代議員については、私が退任し、長谷川美幸（57回卒）さんに加わってもらいました。樋浦さんは、支部長もふくめ長い間、同窓会活動にご尽力いただきました。ありがとうございました。

なお、延期となっておりました「退職記念祝賀会」につきましては、令和3年10月3日にオンラインで開催いたしました。都合で印南先生は参加できませんでしたが、羽鳥先生、家富先生、各先生方のゼミ卒業生からの思い出話などが披露され、たいへん有意義な祝賀会となりました。ご報告申し上げます。

結びに、今後とも、同窓会活動の活性化のため、数学科支部の皆様のより一層のご支援をお願い申し上げ、近況報告といたします。

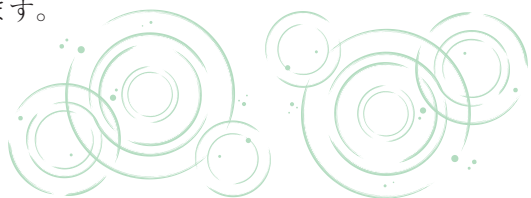
物理学科

支部長 麿沢 祐一

物理支部は、例年通りの活動をしてまいりました。その中でも、できるだけ理学部物理学科の学生を支援する活動ができないかと考えております。

今年は、6月8日のケルビン祭に向けて、毎年、物理支部から、表彰される4年生に進級する学生3人に副賞として、それぞれ1万円の図書カードを、他に物理プログラム進む学生4人に対してそれぞれ5千円のやはり図書カードを贈呈しています。それを大野プログラム長に差し上げました。一層物理プログラムの活性化につながってほしいと願っています。

また、これをきっかけに学生の皆様と触れ合う機会が増やすことにより、交流も盛んになるように思っております。



化学科

支部長 畠野 弘通

同窓の皆様、未だに収束しないコロナ禍の下で、いかがお過ごしでしょうか。リモートワークや遠隔授業が普通となり、逆に、その方が仕事や授業に集中できるとの報道もあります。しかし、コミュニケーションをとる力が低下しないのでしょうか。将来、シンギュラリティが起こっても、その力は大切であり、「新しい生活様式」の中でも、その力を伸ばす必要があると考えます。

新型コロナウイルス感染防止のため、役員会、評議員会、総会・講演会・理学部との懇談会などが、昨年度と同様、メール審議やZoom会議となりました。高大連携事業をはじめ各種の事業は、今年も、中止でした。コロナの収束を願うばかりです。

化学科支部の活性化や化学プログラム在籍の学生支援を図るため、新規事業、継続事業を募っています。学部事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。

今年もご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

生物学科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルスは、オミクロン株などと新たな株に変異しながら猛威を古い、相変わらずの勢いです。それでも、この頃は全国的に幾分患者数も減り、このまま感染が終息してくれるものとの期待も少しは出てきました。頼みの綱のワクチン接種も4回目の案内が出るまでになり、国内初の飲み薬も承認されようとしております。

さて、同窓会生物学科の活動ですが、令和3年度は例年以上に何もなく、会議はすべてメールによる稟議か、役員会と総会は流行りのリモート会議で行われ、慣れないリモートに四苦八苦での参加でした。

6月に行われた総会と特別講演会のご案内も、全員に文書で連絡できず、かといって、メールでご案内するにも若干の方々しかメールアドレスが分からず、全くもって申し訳ないことですが、実際にご連絡できた方は僅かな方々のみでした。次年度からは、皆さんに文書でご案内したいと思います。また、この会報をお読みの皆さんに、事前にメールアドレスを私（tomaraki@m2.tlp.ne.jp）に長谷川さん（会報末尾の事務局アドレス）にご連絡戴ければ幸いです。

最後にはお願いです。生物学科同窓会の役員、代議員等、私を含めて高齢者ばかりになりました。特に、生物学科と理学部の事務局を兼任されている清水榮一さん、長谷川博さんが、交替を望んでおります。ぜひ、新しい方々への代替わりをお願いいたします。

毎年当支部の支援のもと行われてきた「地質の日サイエンスフェスティバル in 五十嵐キャンパス」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2020年度・2021年度に続き、2022年度も中止となりました。2022年新年会も同様に中止となりました。今後、新潟大学Weekの「地質科学_卒業生と在校生の集い」や「秘酔」、「地学ハイキング」などのイベント開催を含め、卒業生・在校生・教員の交流・懇親が対面で深められる日が早く来ることが望まれます。

2022年度の集中講義「土质地質学」は、山崎 勉氏（昭和59年度卒、国土防災技術株式会社）に担当をお願いし、昨年度と同様に、Zoomを用いたオンライン授業が行われました。

野外実習A（進級論文）は、例年通り、長岡市小国町地域と山形県鶴岡市温海地域とに分かれて行われます。小国町地域では7月現在進行中ですが、温海地域では夏休みに泊まり込みで実施されます。毎年度多くの学生が野外実習A（進級論文）を履修して、JABEE（日本技術者教育認定機構）認定コースの「地質エンジニアリングコース」の修了や技術士補を目指しています。2021年度の卒業生の多くも、地質系企業・機関・団体に就職しています。「野外地質調査・野外調査に基づく研究なら新潟大学理学部の地質・地質」と言われる伝統が続くよう、当支部はこれからも教室への協力を続けていきます。同窓生の皆様には、地質科学教室（地質科学プログラム）と

同窓会へのご指導ご鞭撻をいただきますとともに、変わらぬご支援の程、よろしくお願いいたします。



会員の皆様には、いつも活動へのご理解とご協力をいただきありがとうございます。私は昨年度より、大学院で学ぶ機会を得てこれまでとは違った生活を送っています。その中で、会員の皆様がそれぞれの職場や生活で頑張ってもらっている様子を知る機会が増えました。年齢を重ねるにつれて、苦労が増えることもありますが、そのような時こそ仲間との交流で息抜きしたり刺激を得たりできると良いと感じています。

また、他大学で過ごしてみて、改めて自然環境科学科での4年間が素晴らしいものだったと実感しています。設備面では整っていませんでしたが、先生方は学生の気持ちを正面から受け止めて下さり、講義以外の時間にどの先生方ともたくさんの関わりを持つことができました。そのような人間関係の中での学びが今に生きていると私は思います。ここ数年のコロナ禍により、人が対面で行う学習や学びの意味が問い直されているのではないのでしょうか。なかなか人が集まらない難しい状況はありますが、理学部だからできる本質を大事にした教育がこれからもなされることを願っています。

最後になりますが、今年度もリモート中心の同窓会活動となります。役員は仕事を抱えながらのボランティアで活動を運営しております。至らない点もありますがお許しください。

全学同窓会からのお知らせ

▶各種イベント・事業の見送り

令和3（2021）年度も7月に予定されていた新潟大学・全学同窓会懇談会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、開催中止となりました。10月の新潟大学・全学同窓会交流会の講演会もコロナ禍の影響により、オンラインでの開催となりました。事業計画の縮小にともなって、運営委員会・理事会等の会議も必要最小限（書面審議など）の活動となりました。

活動の縮小を余儀なくされ、例年よりも応募件数が少なかったものの、「雪華支援事業」では13件の事業が採択されました。

▶賛助会費納入のお願い

前述の「雪華支援事業」の予算は同窓生からの賛助会費を原資としています。事業の拡大・充実のためにも全学同窓会の賛助会費の納入をお願い申し上げます。

首都圏同窓会

と私

理学部首都圏同窓会の現況

首都圏支部長 安藤 勝利

皆様が御存知のとおり、新型コロナウイルスが2019年12月に中国で発見され、パンデミックに陥っています。

日本においても2020年1月に感染が確認されて以来、幾度となく感染拡大が続いており、その都度社会的制約が続いています。

今後も手洗い、うがい、マスク着用等の日常的な注意の他に「密」を避けつつ、withコロナを心掛けることが推奨されています。

こうした現状の中、理学部首都圏同窓会には多くの人が集まる行事であるため2020年度、2021年度の開催を見送って来ました。

今後は、この感染症に対する有効な治療薬の開発等により、エンデミックへの移行が進むことを見守り、活動の再開を期して参りたいと思います。

皆様におかれましては、理学部首都圏同窓会に対して引き続きのご支援をお願いいたします。

若手卒業生から（実社会に出て）

数学プログラム

2021年卒 水谷 華

現在、新潟県公立高校教諭として働いています。一生懸命な生徒たちに囲まれて、毎日楽しく過ごしています。

授業で教えたことを友達と協力し精一杯に発揮しようとする姿を見ると嬉しく思うと同時に、私自身が大学数学に対して粘り強く仲間と共に学んでいた頃を懐かしく思います。他教員と比べて自分の力不足を感じる部分は多々ありますが、先輩方に助けられたり、大学での学びを振り返ったりすることで1教員として働くことができます。

今後も、思考力を高めること、粘り強く取り組むこと、仲間と協力することを数学を通して教えられるよう、自らの数学力や指導力向上に向けて努めていきたいと思っています。



“色材として”のスペックに影響を及ぼす極めて重要な技術です。今の業務は大学時代に研究していたテーマとは一切関係がないといえますが、大学院時代に培った粘り強さとデータを解釈する力などが現在の開発活動を下支えしていることに疑念の余地はないと確信しています。これからも業務に邁進し、我々の生活を少しでも豊かにできるような製品を作っていきたいと思っています。

生物プログラム

2022年卒 棚橋 勇斗



私は新潟大学理学部を卒業し、医薬品販売者としてドラッグストアで働いています。健康寿命の延伸や昨今の新型コロナウイルスの影響もあり、自分自身で病気の予防や健康維持を心がけるセルフメディケーションの意識が高まっています。私はその一人一人のセルフ

メディケーションに適切なサポートができるよう、日々業務に取り組んでいます。また、今の仕事は新しいことばかりで、大学で学んだ知識や技術を活かせる機会はなかなかありません。しかし、学生として進んで物事に取り組んできた姿勢は、今の仕事にも活かされていると思います。

社会人になり、周囲の環境は大きく変わりました。人間関係の変化や責任の大きさなど、不安になることがたくさんありますが、前向きに仕事に取り組んでいきたいと思っています。

物理学科

2017年卒 渡部 来



私は今、自然科学研究科を終了し3年間新潟県立高等学校の講師を経て中学校で教諭として働いています。理学部物理学科へ入学してからの学校の先生という夢を成し遂げました。令和4年度採用から新潟県では中高共通採用となり

どちらかの校種で勤務する形となりました。私としては高校での勤務を希望しておりましたが中学校での日々も想像以上に充実したものとなっています。高校では物化地生と4分野に分かれています但し中学では全てを教えるので慣れない科目での授業に苦戦しつつもやりがいを感じております。現在は教諭として多くのことを学びつつ「理科」を好きになる生徒の育成を自身の課題としています。将来教え子たちが母校である新潟大学理学部へ進学してもらえよう精進していきたいと思っています。

化学科

2019年卒 伊東 輝

私は新潟大学大学院自然科学研究科を卒業し、昨春より化学系のメーカーに勤務しております。現在は配属から約一年が経ち、顔料の分散に関する研究に従事しています。さて、顔料というとどこことなく縁遠い印象がありますが、色材自体は我々の生活の中で様々な形（インク、塗料、化粧品など）で活用されています。そして、顔料分散は化学的安定性と発色力など様々な



地質科学科

2015年卒 香取 拓馬

私は2017年に大学院修士課程を修了し、産業技術総合研究所（つくば市）での研究生生活を経て、2020年からフォッサマグナミュージアム（糸魚川市）に勤めています。新潟県の西端に位置する糸魚川市は、市全域がユネスコ世界ジオパークに認定されています。ジオパークは、地質—動植物—文化の繋がり（ストーリー）を大切にしているプログラムで、分野横断的な学びの面白さがあります。それら学術的知見を一般の方にも分かりやすく伝えるためには、インタープリテーション能力が欠かせません。この点は、理学部内サイエンスミュージアムでの2年間の解説員経験が生きているなと感じています。2021年には、サイエンスミュージアムと当館がサテライト提携を結びました。遠方の方も多いかと思いますが、ぜひ遊びにお越しください。



自然環境科学科

2017年卒 熊木 文俊



私は理学部自然環境科学科を卒業し、現在は総合研究大学院大学で博士課程に在籍しています。総研大は大学共同研究利用機関である研究所に付属する大学院であり、私はつくばの高エネルギー加速器研究機構で研究しています。私の博士課程での研究は放射光という加速器から放出されるX線を利用した研究です。私が最初に放射光に触れたのは新潟大学に在籍していた学部生時代です。初めて放射光施設を訪れた時に、最先端の設備や施設の壮大さに感動したことが思い出されます。博士課程の研究テーマは、放射光を使って溶液中の光化学反応をピコ秒からマイクロ秒程度の短い時間スケールで観測する手法を開発することです。将来的には様々な分野の人と共同研究ができたらと考えています。放射光を使った研究に興味があれば、ご連絡いただけたら嬉しいです。

フィールド科学人材育成プログラム

2022年卒 松村 拓樹



私は新潟大学理学部フィールド科学人材育成プログラムを卒業し、新潟大学大学院自然科学研究科環境科学専攻フィールド科学コース博士前期課程に進学しました。大学院では佐渡島を駆け巡り、卒業研究から行っている水生昆虫群集の研究をしています。研究は大変ですが、好きな水生昆虫の研究は面白く、非常にやりがいを感じています。

研究を行うにあたって、指導教員だけでなく、佐渡島のビオトープ管理団体の方々や住民の方、研究を通して知り合った研究者の方々など、多くの人に支えられて研究ができていると実感しています。今後もこのようなつながりを大切に、良い研究結果、成果を報告できるよう、研究活動に励んでいきます。

理学部同窓会整備・振興寄付金

拠出者御芳名(敬称略)

令和4年6月現在

● 数学科支部

戸井田 正	五十嵐隆夫	細野 晃	山家 正之
土屋 和平	井村 悦子	三浦 正司	小山 尚之
伊藤 道一	小林祥一郎	風巻 利夫	浅野 裕司
大澤 正	石田 恵子	小畑 裕	西田 裕志
岩田 隆子	加藤 俊男	富田 保宏	関野 文瀬
吉岡 智晃	山口 真理	玉木 正己	伊藤真知子
堀 行	裸 詳子	田中 環	佐々木潔朗
高橋 良子	日比登史男	佐藤 浩一	清塚 拓也
村松 芳郎	伊東 孝芳	二瓶 静男	小橋 勇太
樋浦 卓嘉	若林 広明	諸我 伸子	石田すみれ
田口 継治	原 幸仁	清水美和子	江幡 隆典
井上 昭導	竹内 正文	安蔵 顕一	水谷 華
水谷 浩	青木 孝史	渡邊 譲	
金子 正義	鈴木紀美子	伊皆 嘉樹	
丸山 哲弘	茨木 裕子	角井 伸一	
永井 健樹	浅野 学	小林 伸弥	
本家 武子	勝田 智博	牛丸 智博	
松田 重生	丸山 善久	笠原ふき子	

● 物理学科支部

金井 芳夫	渡辺 孝一	鈴木 俊男	黒沢 昌基
森山 久夫	藤井 博	裕間 俊昌	山田 徳昭
赤塚 節	垣内 信夫	前田 義憲	吉田 浩平
坂部 充孝	木下 正仁	矢代 博行	伊藤 静香
熊谷 周三	池田 進一	石川富士男	坂本 泰史
畑野 清司	白川 保憲	小池 進	小関 賢
寺井 宏	若林 恒夫	最上 正人	五十嵐誉廣
渋谷 龍生	岸 澄夫	川田 尚	山崎美穂子
松本 忠	森野 幾夫	野坂 孝雄	本田 瑞紀
鈴木 守夫	青柳 秀一	高倉 聡	石原 健太
小林 一男	廣田 星一	工藤 幸人	安野 健太
丸山 敬	金澤 光隆	中村 正博	越後 弥大
本間 正宣	上林 俊一	山岸 靖宏	菅野 義博
小川 稔	佐藤 三男	井上 真吾	剛司 和樹
高橋 真澄	小松 孝雄	水谷 智裕	高田 恭平
伊藤 繁夫	渋谷 孝雄	須藤 祐伸	
橋本 俊彦	中村 一昭	木村 睦勇	
寺前 直子	高見沢 一男	風間 修	
海老名郁夫	茂野 一雄	佐藤	

● 自然環境科学科支部

松橋 泉	藤本 真悟
麻里 天竺	長谷川達也
齋藤 真穂	利恭

● 化学科支部

伊藤 良夫	吉川 義雄	本間 悟	三上 正人	片山 肇
土田 雅子	松村 信輔	東田 良和	飯田 英典	山田 幹
佐野 寛	稲川信之助	百瀬 泰紀	岩崎 良弘	山田 伸幸
梅澤 貞雄	殿内 重政	羽深 等	宮本 博之	細川 健一郎
長尾 典	間 和彦	村山 茂子	斎藤 久尚	高橋 聖美
佐合ヒロ子	土屋真知子	孫田 淳	葉茸 友美	渡辺 勲
松澤 澄江	浅井 恒雄	尾崎 恭子	佐藤 浩一	菊地 真人
佐藤 茂司	星野 洋子	半田 隆	田澤 滋樹	井上 和也
井古田仁司	生野 久人	谷口 素子	稲野 浩一	伊藤 統也
赤沢 宏	福島 幹雄	田島 朋子	石山 友英	新関 達也
半田 進	坂本 憲司	青柳 義昭	板垣 健	
岡本 紀子	内山 昭博	吉井 文子	小嶋 素志	
岩野 宜哉	中條 光章	森田 朗	小林 幹生	
鈴木 信義	山口 衛久	三ツ寄敏雄	矢部真由美	
青木 英二	佐山 久	中野 国芳	鷲尾 秀樹	

● 生物学科支部

佐藤 昭子	長谷川 博	林 正栄	伊達 達朗	柴野 卓志
正木 愛子	兒島 英介	小野寺 隆弘	猪熊 正則	久保 美奈
大森 康正	清水 榮一	富永 智弘	藤原 信一	木村 太郎
高橋 宗昭	星野嘉恵子	北川 昌明	頓所 裕史	川野邊由香
古橋 恂	長谷川英男	堀 昌明	佐々木 哲	佐野 真規
細谷 安彦	正田 豊	高須 俊克	榎本貴美子	
伊東 和江	箕輪 正和	田丸 幸一	門脇 康之	
伊藤 正一	丹羽 潤	笹川 通博	松本 真実	

● 地質科学科支部

倉又 孝夫	松波 武雄	薦田 靖志	佐藤 壽則	海野万葉香
大西 淳	賢治	横堀 正純	細野 延久	山崎 晴香
菊池 俊栄	樋口 茂生	清水 功	渡部 直喜	真鍋 達郎
畑中 博文	滝澤 洋雄	小山内康人	佐久間 幹	長谷川千博
山岸 俊男	文雄	飯野 芳則	柄沢 幸一	藤井健太郎
近藤 和久	邦正	稲葉 充	小島 玄生	鈴木 望夢
石橋 輝樹	正明	北脇 裕士	庄司 浩	滝澤 拓実
加藤 靖夫	成昭	鈴木 雅彦	榎本 武敏	川尻 啄真
徳間 正一	誠	栃原真与子	竹内 均	三堀 徳也
赤松 陽	昇	高橋 努	関根 聖道	
山野井 徹	信行	田中 松永	子 静人	
吉田 滋	伊豫田成子	柿崎 聡		

● 旧職員

石塚 紀夫	兼田 正治	古澤 昭
渡部 剛	長谷川美行	鈴木 俊雄

表1

2021年度 理学部同窓会決算

一般会計

	費 目		予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金		5,000,000	5,175,500	175,500	
	終 身 会 費		4,000,000	4,040,000	40,000	新入生202名×20,000円
	寄 付 金 等		1,000,000	1,135,500	135,500	正会員からの同窓会整備・振興寄付金(315名)
	他 会 計 繰 越 金			0	0	
	雑 収 入		80,000	92,534	12,534	預貯金利息、支部補助金清算、全学同窓会資料会員配送費清算、等
支出の部	前 年 度 繰 越 金		3,025,943	3,025,943	0	現金、第四北越銀行普通預金、郵貯通常貯金、郵貯振替貯金
	合 計		8,105,943	8,293,977	188,034	
支出の部	会 議 費		175,000	5,175	-169,825	諸会議交通費、会場費
	広 報 費		2,450,000	2,172,442	-277,558	
	「会報」発行費用		400,000	382,052	-17,948	理学部同窓会誌「会報22号」(7500部)印刷代
	「理学部は今」発行費用		450,000	493,845	43,845	理学部機関誌「理学部は今」(7000部)費用分担
	会員宛資料配送費		1,000,000	980,232	-19,768	6921名分 その他資料印刷費・配送運賃
	そ の 他		600,000	316,313	-283,687	H P 運営費
	事 業 費		1,265,000	351,940	-913,060	
	理学部支援事業費		720,000	300,000	-420,000	グローバル人材育成推進事業支援無し・卒業祝賀会費用を記念品代へ
	支部事業補助費		450,000	0	-450,000	各学科支部へ助成無し
	名 簿 編 集 費		20,000	0	-20,000	
	そ の 他 事 業 費		75,000	51,940	-23,060	特別講演会ポスター・講師謝礼・消耗品等事務費
	負 担 金 等		489,350	492,645	3,295	全学同窓会賦課金
	支 部 交 付 金		460,000	461,325	1,325	50,000円×6支部+首都圏支部160,000円=460,000円
	事 務 諸 経 費		123,000	79,600	-43,400	光熱水費、郵送料、払込手数料・料金、印刷費、消耗品、等
	事 務 局 費		400,000	295,200	-104,800	事務局人件費
	人 件 費		200,000	192,000	-8,000	後援会パート手当
	予 備 費		1,043,593	10,000	-1,033,593	前会長香典料
	他会計(積立金特別会計)繰越金		1,500,000	1,500,000	0	
	合 計		8,105,943	5,560,327	-2,545,616	

積立金特別会計 出納

特別会計	費 目		収 入	支 出	残 高	説 明
特別会計	2020年度までの積立額				16,000,469	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	繰入金・繰出金		1,500,000	0	17,500,469	
	定期預金元金振替分の利息		35		17,500,504	その他の利息は一般会計預金に振り替え

表2

2022年度 理学部同窓会予算

一般会計

	費 目		前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
収入の部	終 身 会 費 ・ 寄 付 金		5,000,000	5,000,000	0	
	終 身 会 費		4,000,000	4,000,000		新入生入学定員200名×20,000円
	寄 付 金 等		1,000,000	1,000,000		正会員からの同窓会整備・振興寄付金等 目標額
	他 会 計 繰 越 金			0		
	雑 収 入		80,000	80,000	0	利子、全学同窓会発送資料同封手数料交付金、支部補助精算金等
支出の部	繰 越 金		3,025,943	2,733,650	-292,293	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
	合 計		8,105,943	7,813,650	-292,293	
支出の部	会 議 費		175,000	175,000	0	諸会議交通費は前年度額に上乗せ、その他会場費他
	広 報 費		2,450,000	1,950,000	-500,000	
	「会報」発行費用		400,000	400,000	0	理学部同窓会誌「会報23号」印刷代 前年度決算額を参考
	「理学部は今」発行費用		450,000	450,000	0	理学部機関誌「理学部は今」費用 前年度実績を参考
	会員宛資料配送費		1,000,000	1,000,000	0	会員宛会報などの郵送料・運賃等 運賃改定・会員増を勘案
	そ の 他		600,000	100,000	-500,000	H P 運営費 前年度実績を参考
	事 業 費		1,265,000	1,265,000	0	
	理学部支援事業費		720,000	720,000	0	前年実績を基礎
	支部事業補助費		450,000	450,000	0	〃
	名 簿 編 集 費		20,000	20,000	0	
	そ の 他 事 業 費		75,000	75,000	0	特別講演会事業
	負 担 金 等		489,350	489,350	0	全学同窓会分担金 500万円×学部定員数で按分+定額30,000円
	支 部 交 付 金		460,000	460,000	0	50,000×6支部+首都圏支部160,000
	事 務 諸 経 費		123,000	123,000	0	光熱水費、事務通信費、払込手数料・料金、印刷代、消耗品、パソコンOS
	事 務 局 費		400,000	400,000	0	事務局人件費 前年度決算を参考
	人 件 費		200,000	200,000	0	後援会パート手当 例年通り
	予 備 費		1,043,593	1,000,000	-43,593	2022年度積立金
	他会計(積立金特別会計)繰越金		1,500,000	1,751,300	251,300	
	合 計		8,105,943	7,813,650	-292,293	

特別会計 収支予算

特別会計	費 目		収 入	支 出	残 高	説 明
特別会計	2021年度までの積立額				17,500,504	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	2022年度積立額		1,000,000		18,500,504	
	2022年度利息		35		18,500,539	定期預金利息の内、定期元金に振替えられる分 前年並みを計上

事務局より

1、理学部同窓会「総会」開催

新型コロナウイルス禍の為にリモートによる審議とした。

●議 事

- ・会長選出
麿沢 祐一（物理学科支部長）が新会長に選出された。

- (1) 2021年度事業報告・決算報告（別表1）
・事業報告及び決算報告・会計監査は報告のとおり承認された。
- (2) 2022年度事業計画・予算案（別表2）
・提案のとおり承認された。
- (3) 役員改選
・提案のとおり承認された。

2、2021年度事業報告

- (1) 広報活動
・正会員に会報22号はじめ雪華などの広報紙を送付。
- (2) 理学部からの要請にもとづく各種支援
・例年経費補助をしていた理学部卒業祝賀会は卒業記念品を贈呈。
・グローバル人材育成プログラムへの支援はコロナ禍の為に見送り。
・高大連携アドバイザーへの支援
- (3) 全学同窓会との連携について
・賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献した。
・理事会、運営委員会に参加し、運営に貢献した。
- (4) 会費及び寄付金について
・後援会と連携し、2021年度新入生より会費を徴収。
・財政力強化のため寄付金のお願いにより、多くのご寄付を頂いた。
- (5) 特別講演会
・期日：2021年10月20日(水)
・会場：新潟大学理学部B棟303
・講師：長浜バイオ大学バイオサイエンス学部、准教授 竹花 佑介（自然環境科学科回生）
・演題：メダカの多様性から性決定遺伝子の進化を探る
Zoomを使用しリモート講演会

2022年度 理学部同窓会役員名簿

役 職	支 部	氏 名	役 職	支 部	氏 名
会 長	物 理 学 科	麿沢 祐一		化 学 科	本間 悟
	数 学 科	轡田 勝祐			田辺 薫
	物 理 学 科	麿沢 祐一			清水 榮一
	化 学 科	畠野 弘通		生 物 学 科	長谷川 博
副会長	生 物 学 科	荒木 勉			堀 昌明
	地 質 科学科	豊島 剛志			関谷 一義
	自然環境科学科	尾原 祥弘		地 質 科学科	佐藤 壽則
	首 都 圏	安藤 勝利			渡部 直喜
幹事長	地 質 科学科	渡部 直喜			畑澤 尚宏
		武石 文雄		自然環境科学科	加藤 直之
	数 学 科	轡田 勝祐			柿原 芳章
		田中 環			安藤 勝利
幹 事		鈴木 重行		首 都 圏	飛鳥 滋
	物 理 学 科	坂井 章			信田 庸二
		笹川 民雄		数 学 科	若杉 和也
	化 学 科	三ッ寄敏雄	監 事	自然環境科学科	志賀 隆

転退職された先生方（令和4年3月）

退職 自然環境科学プログラム

浮田 甚老（教授）

在職期間：平成19年9月～令和4年3月
専門分野：海水力学、熱力学、気候変動

転職 生物学プログラム

池内 桃子（准教授）

在職期間：令和元年12月～令和4年3月
専門分野：植物再生学
転 出 先：奈良先端科学技術大学院大学

新潟大学理学部同窓会(事務局)

住 所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部内
T E L 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
U R L http://www.ridoso.jp/

◆ 編集後記 ◆

今号の編集は自然環境科学科支部で担当させて頂きました。お忙しい中、原稿をお寄せ頂いた皆様におかれましては、誠にありがとうございました。また、原稿の収集、依頼等にご尽力頂きました、理学部同窓会事務局にこの場をお借りしまして感謝申し上げます。

コロナウィルス感染症の流行後の社会状況では、「同窓会」というものが非常にやり難い状態が続いております。様々な場所で活躍されている会員の皆様、久しぶりに集まって語らうことのできる日が、1日でも早く訪れるようお願いするとともに、その日が来るまで負けないように活動して参りますので、今後とも同窓会活動にご協力頂ければ幸いです。